水平なパラフレーズの可能性

—— 詩を適切に言い換えていくために

松井 晴香 （一橋大学）

「葡萄食む一語一語の如くにて」（中村草田男）という俳句を、たとえば「言葉を重々しく発するように、葡萄を一粒一粒ゆっくりと食べている」と平たく言い換えてみる。このとき、もとの俳句がもたらす鑑賞経験は保たれるのだろうか、それとも何かが失われざるをえないのだろうか。はては、詩をこのように言い換えることは、そもそも詩の味わい方として適切なのだろうか——詩のパラフレーズをめぐるこれらの問題が、本発表のテーマである。

この問題は、分析的伝統をくむ詩の哲学において論争的なテーマのひとつだ。一方には、詩のパラフレーズは不適切で、失敗せざるをえないとする論者たちがいる。たとえば Peter Lamarque は、詩の実践において詩を詩として読むことは、詩の内容（詩が何を表現しているのか）と形式（詩が内容をどのように表現しているのか）を不可分のものとして経験することだとする。そのため、受け手も詩の実践に参加している以上、この慣習に従って形式と内容の融合を詩に要求する。そのため、詩から内容だけを取り出し表現し直すパラフレーズは、形式と内容の融合が経験されるべき詩の鑑賞にふさわしくない、と Lamarque は論じる（Lamarque, 2009）。

他方には、詩のパラフレーズは可能かつ適切だという、正反対の見解を擁護する論者たちがいる。その代表格である Peter Kivy によれば、もとの詩のもたらす経験の完璧な翻訳をパラフレーズに求めなければ、パラフレーズは可能である。また、Lamarque の述べたような形式と内容の融合を求める読み方は、詩の読み方のひとつでしかないうえ、そうした読み方においてさえもパラフレーズはむしろ有用だ、と Kivy は続ける。詩の形式と内容を腑分けして詩を平たく言い換えることは、形式と内容がどのように融合しているのかを受け手が理解し、詩が伝えようとしている命題や経験をよりよく把握する助けとなる、というわけだ（Kivy, 1997; 2011）。

両陣営のどちらにも首肯できる点はある。詩から言い換え可能な意味だけを取り出すともとの詩が矮小化されたように感じられる一方で、パラフレーズが詩のよりよい鑑賞に役立つこともまた事実だ。そこで、本発表は〈詩の意味内容のパラフレーズは不適切だが、それとは別の形のパラフレーズなら適切でありうる〉という折衷的な立場をとりたい。既存の議論においては、往々にして、詩の意味内容を言い換えるパラフレーズが焦点とされる。けれども、パラフレーズは単に詩からその意味内容を垂直に取り出すだけではない。パラフレーズを通じて、ある受け手は詩から喚起されたイメージや連想などを言語化し、ほかの受け手に手渡していくこともできる。こうしたいわば水平なパラフレーズなら、パラフレーズに対する批判に説得力を与えていた直観を捨てることなく、擁護することができる。